

Victory

NO.2

令和6年5月

宮崎県立宮崎西高等学校・附属中学校図書館



日増しに新緑のエネルギーを感じる今日この頃です。5月20日の朝刊一面に「小満」とありました。その意味を複数の辞書・事典で調べてみると「二十四節気の一つ。立夏ののち15日、陽暦5月22日ごろにあたる。万物がしだいに長じて満つる意である。」(日本大百科全書：ニッポニカ、小学館)、「二十四節気の一つ。立夏後の一五日目で、五月二日ごろに当たる。(季・夏) [補注]

草木が茂って天地に満ち始める意。」(現代国語例解辞典 第五版、小学館)、「二十四気の一つ。立夏から十五日目で、陽暦五月二十一日ごろ。▷物が育って天地に満ち始める意。」(岩波 国語辞典 第八版、岩波書店)、以上ジャパンナレッジ School <https://school.japanknowledge.com>, (参照日：2024/5/20) 掲載。こちらは、紙の辞書…「(草木が周囲に満ちはじめる意) 二十四節気の一つ。太陽の黄経が六〇度の時で、四月の中。太陽暦の五月二日頃に当たる。」(広辞苑 第七版、岩波書店)「二十四(節)気の一。陽暦五月二十一日ごろ。草木が繁茂して天地に充満する時分の意。」(新明解国語辞典 第五版、三省堂)。(引用はすべて〈原文ママ〉)

高校総体が始まります。小満のごとく、若きエネルギーを思い存分解き放ってください。応援しています。ところで、言葉の意味を調べるときに、複数の辞書を用いるとその表現の微妙な違いに気づきます。编者(あるいは出版社)の特徴が見えてくる瞬間でもあります。調べるための万能選手であることはもちろん、読み比べる楽しさも味わってほしいと思います。5月24日は「広辞苑の日」です。膨大な数の言葉の意味を日夜編纂する仕事に頭が下がります。そこで思い出したのが、三浦しをん著『舟を編む』(光文社)、赤瀬川源平著『新解さんの謎』(文藝春秋)の2冊。後者は新明解国語辞典を思わず手に取りたくなります。言葉の海を遊んでみませんか。

新着資料紹介はこちらから

今年度より、デジタルで新しい本の紹介案内をしていきます。なるべくみなさんの手元に届くことを願ってこれまで紙媒体でお知らせしてきましたが、毎年約1800冊の本が入るため毎回の紹介枚数も両面刷り2~3枚とかなりの量であることも含め、案内のあり方を検討することにしました。



紙媒体での紹介紙(B4判)は、各クラス・図書館前廊下に掲示します。なお、紙面での紹介案内がほしい人は、図書館カウンターまで声をかけて下さい。



今年度最初の新着資料紹介
NO.0 (昨年度末に入った本
です)はこちらから。

検索・予約・リクエストは



こちらから



自分のデバイス(chromebook、PC、スマホ)から、サクサクできます。

蔵書検索・
予約はこちら
から



リクエスト
はこちら



棚からひとつかみ『高校生直木賞』

今回は、5月19日（日）に東京の文藝春秋本社で行われた高校生が選ぶ直木賞の選考会にノミネートされた4冊と受賞作を紹介します。

文学賞というと、作品を創作することをイメージしますが、この高校生直木賞は、選考者の立場で作品を読み、議論し、受賞作を決定します。11回目の今回、本校生徒2回目の全国大会参加となりました。地方選考会を突破し、本社で行われる最終選考会の選考者として2年7組緒方ゆいさんがリアル参加しました。

高校生直木賞のコンセプトは、「読む+語る+選ぶ=深まる」。地方予選から作品に対する熱い議論が展開しました。同時に、「選ぶ」ための選考基準も自分たちで考え議論していきます。明確な基準があらかじめ用意されていない中での選考に悩みつつ、他者の語りから新たな見解と出会う奥深さを体験できるこの選考会は本当に、本を読むということを多角的に捉える貴重な機会だと思います。

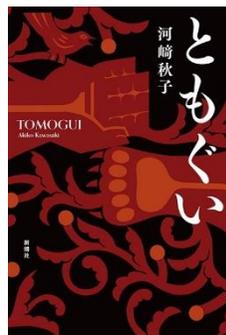
これまでの受賞作および作家の声、参加者のコメント等は、こちらの公式サイトから見る事ができます。



第11回高校生直木賞受賞作

『ラウリ・クースクを探して』宮内悠介著（朝日新聞出版）

参加校39校中21校が推した作品。ソ連（現ロシア）とエストニアを舞台に激動の時代を生きたラウリとその友人達が織りなす、子ども時代から大人になった今が描かれる。まるでノンフィクションのような構成は、読者を引き込むという意見も。歴史上名を残すわけではない「ふつうの人」であるラウリの人物像を取材していく過程で、明らかになっていく事実とそれぞれが抱く葛藤、過去と現実が交差する作品展開にあなたは、何を読み取るだろう。



『ともぐい』河崎秋子著（新潮社）

今回ノミネートされた作品の中で、いちばん議論が活発だった直木賞受賞作品。当初、「これは高校生には難しいのではないか」という意見も多く出された作品だが、猟師である熊爪を通して淡々と展開する描写は、いつしか生きることへの意味を突きつけられる。10代の感性で読んでほしい。

『襦がけの二人』嶋津輝著（文藝春秋）

女性版バディもの。戦前から戦後にかけて、出会った二人の人生を通した結婚観、女性観が垣間見える。この作品は、4作の中で最も意見が分かれた作品。著者が何を軸に置きたかったのかが見えにくく、読後感が微妙だったという意見、かたや時代の流れに翻弄されがちだが、自分のスタンスを持ち続ける生き方に感銘したなど。



『木挽町のあだ討ち』永井紗耶子著（新潮社）

まるで舞台を見ているかのような…議論のなかで出てきた言葉。江戸・木挽町で起こったあだ討ちの真相をつきとめようと一人の武士が、関係者一人ひとりに聞き取りをしていく。各々の視点から語られる事件にまつわる話には、ある共通点が。タイトル、カバーイラストにもストーリーを読み解くヒントが。



図書委員会からお知らせ

＊朝陽祭で実施する古本市用の本を集めています。部屋の片隅で眠っている本があったら、クラス図書委員に渡して下さい。毎年大好評の古本市、今年も乞うご期待！